

めいぼくせんだいはぎ 伽羅先代萩

〔解説〕

天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦戯場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（またたき）、後半は「政岡忠義（まさおかちゆうぎ）」と呼ばれています。

〔あらすじ〕

奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つるきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。しかし敵方の計略で若君は危うく毒入りの菓子を食べさせられそうになり、千松が身を呈してその場を救ったのです。その後、弾正等の悪事は露見するところとなり、幾人もの人の命と引き換えにお家は無事存続となるのでした。

◇竹の間の段◇

仁木弾正一味から鶴喜代を守るために、病氣といつわり男を近づけぬようにする政岡でしたが、敵方も策を巡らし政岡を陥れようとしています。若君への見舞いと称して現れた一味の妻、八汐ら一行。そこへ天井裏に配された曲者が加わり、一芝居して政岡に罪を着せようとしています。しかし、八汐はこの不自然さを沖の井に咎められ、その場は事なきを得るのです。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

竹の間の段

制すべき身の制せられ、光失ふ義綱公、蟄居ましますその上に、代継ぎの若の所労とは、云ひ含めたるお乳が計らひ、所存は深き奥御殿の、出入りを堅く改めて、むさと風だに通さざりけり。

政岡御前に手をつかへ、

「為村の妻女沖の井、渡会の内室八汐、御病氣御伺ひの為上られました。御挨拶遊ばしませ」

と、お乳が詞に点き給ひ、

「ヲ、二人ともよう見舞ふてくれた、大儀／＼」

と情ある仰せにはつと恐れ入り、

「御悩み以ての外と承りしに合はしては、御顔持ちもやつれ給はず、先づはお嬉しう存じ上げます。しかし御膳もしか／＼召し上がられぬ由、それでは自

然と御身の弱り。何卒おすゝめ申し上げたさ、聊か用意致しました御配膳、差し上げたう存じまする。

ソレ女中方、沖の井が持参致せし御膳、ソレ／＼早う」

の詞の内、

「はつ」

と答へて腰元が捧ぐる御膳目八分、御前に直せば嬉しげに、

「そんならもう飯を食べても大事ないか」

と、座に着き給へば政岡が尻目にきつと睨まれて、

「イヤ欲しうない、厭ぢや／＼。アレ見い千松、雀が飯を喰ひたいやら、口を開いてさもない奴の。笑へ／＼」

と手を叩き、紛らし給ふ有様は、お乳に心を沖の井も様子あらんと控ゆれば、八汐は席を進み出で、

「コレ政岡殿、御膳も召し上がられぬ程の事ならば、なぜ典薬は召されぬぞ」

「サアそれに油断とはなけれども、男体せし者をお嫌ひなさるゝ故、御容体書にてお薬調合させるばかり」

「サアさう承りし故心付きしは、御典薬大場道益が妻の小巻こそ、夫に劣らぬ医術の者。お脈伺はせん為召し連れた。ソレ小巻を御殿へ通されよ」

と、押し付け業も悪工み、しめし合はせて奥の間へやがて呼び出す女こそ、遠に医師のつまはづれ、はるか末座に控へ居る。

「ヲ、これはく、道益殿の室小巻殿とやら、若君様の御脈体、御伺ひ遊ばされよ。サ近うく」

の口移し、御免を請けて御傍へ臆る色なくにじり寄り、御手を取って頭を傾け、押さへつゆるめつ暫く

考へ、

「コリヤコレ今をも知れぬ御脈体。モウくく者婆扁鵲でも叶はぬ大事」

と、云ふに皆々顔合はせ、暫し詞もなかりしが、心半乱政岡は、若君しつかと抱き締めて、

「ムウ御大事と云ふてこの上の事があらうか。見損じなりとて御咎めはあるまいぞや。とくと心を鎮めて、今一応も再応も診脈あれ」

「ハ、成程、只今伺ひ奉る御脈は絶体絶命。さりながら、御面体の血色には、少しも恙まします。恐れながらお居間を移し、今一度お伺ひ申さん」

と、座を下がれば政岡も、小巻が傍へすり寄れば、再び探る浮沈遅速、とくと伺ひ、

「コリヤどうじゃ。あれなるお居間で見た時は必定の御死脈。今又これにて伺へば、随分健やかな御脈

体。ハテ心得ず」

とお居間の方、きつと見やればすかさぬ八汐、掛けたる長刀おつ取つて、石突き突つ込み天井の板こぢ放せば怪しき曲者、落つるをその俣取つて伏せ、通路の鈴の縄引つ切り、高手にしつかと縛めたり。

「サア／＼死脈の筋が現はれた。有様に白状せい。陳ずるに於ては拷問にかけん。サア／＼何と／

＼」

と締め上ぐれば、

「ア、コレ／＼申し、申します／＼／＼わいの。アレアノ千松が世に立てたい、どうぞ若君を打ち殺してくれと、アノお乳の人の頼み故」

と、聞くより政岡氣をせき上げ、

「ヤイ／＼／＼黙りをらう。モあんまり呆れて詞が出ぬ。ついぞ見知らぬ下郎めが、大それた事云ひか

けしは、エ、聞こへた、この政岡に難を付け、和子のお傍を追ひ退けんと、コリヤ工んでの拵へ事ぢやな。おのれその方人を、白状させて見せふぞ」

と、勢ひ込んで立ちかゝるを、八汐が隔てゝ、

「さうはさせぬ。アノマア猛々しい顔わいの。知れてある／＼、イヤサこなたの工みと云ふ事は、サ知れてあるわいの」

「ム、そりや何故に、マ何を証拠」

「ヲ、その証拠はコレこの願書。鶴ヶ岡の松が根に、人形諸共埋めてあつた。若君を呪ふ恐ろしい文言、願主松ヶ枝節之助、乳母政岡と書き記したが、サ慥かな証拠」

「イヤ／＼／＼、譬へいか様の物があるとても、天道こそよく御照覧。更々この身に覚へはない」

「ム、覚へなくば云ひ訳聞かう」

「サア」

「サア」

「サア」

「サア、サアくくく、サ何と」

と、せりかけられて政岡が、覚へなき身の云ひ訳も、証拠なければ今更に無念涙に詞なし。

「ム、ホ、ホ、ホ、ホ。ヲ、マ天命は恐ろしい物ぢやな、ヲホ、ホ、ホ。云ひ訳立たねば大罪人、役人中へ引き渡して糾明さす」

と、飛びかゝって引つ立つれば、泣き出す千松若君は、扇振り上げ八汐が手先、御腹立ちの続け打ち。

「ヲ、痛く、ヲ、痛やの、ヲホ、ホ、ホ。申し若君様、コリヤ何となされますへ。アノ乳母めはな、あなたを殺さうと致します。ヲ、こはく、ヲ、こはや

の、ヲホ、ホ、ホ。サアくく早う牢へ打ち込みませ

ふ」

「イ、ヤ殺されても大事ない。ヤイ政岡、必ず何処へも行くなよ。アレ千松、乳母を牢へ入れると云ふ

わいやい」

「ハイ、かゝ様を牢へ入れるなら、私も付いて参ります」

「ヲ、おれも一緒に行かうぞよ」

「エ、くそりやマア何を御意遊ばすぞいの。アノ政岡は、お家を狙ふ大科人」

「イ、ヤ科人でも悪人でも、乳母一人はやる事ならぬ。乳母と離れている事は厭ぢやく」

と取り縋り、乳房の恩を子心にも、忘れ給はぬ御仁心。有難涙お乳の人、

「勿体なや」

と抱き締め、泣くより外の事ぞなき。

「エ、齒搔いやの。イヤモ何ぼお庇ひなされても、政道には代へられぬ」

と、又立ちかゝるを沖の井が、引き戻して押し隔て、

「イヤ政岡殿に科はない」

「でもコレこの願書。願主松ヶ枝節之助、乳母政岡とあり／＼と」

「サ書いたが覚へない証拠」

「ソリヤ又何故エ」

「さればいなあ。左程の工みをする者が、我が名をあり／＼記し置き、後の難儀になる様な、あざとい事しておきさうな物と思召すか。ガもしやその名が八汐とあれば、お前は科を蒙る気か」

「サアそれは」

「ホ、／＼。人を呪はゞ穴二ツと、詮議立てする八汐様、お前の胸が心得ぬ」

と、工みの底を見透かせしは、遠に庄司為村が奥床しくぞ見へにけり。

「イヤナニ政岡殿にも、随分と心を付け、若君様の御介抱、ナ。イザ八汐様御休息」

と、上辺は浅う底深う、漂はされて兩人は、磯へも寄らず沖の井が、目鏡はづさぬ一捌き。

「曲者引け」

と嚴重に、心は隔つ竹の間の襖

（押開け入りにけり。）

※演者・時間などの都合により抜き差しがあります。

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解 説〕 寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕 主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀を許さず、一人尼ヶ崎に転居するのですが、そこへ光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのです。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。十次郎は敗戦の様子を伝えて息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

夕顔棚の段

御法の声も媚きし尼ヶ崎の片ほとり。誰が住む家と夕顔も、おのがまゝなる軒の棲。あたり近所の百姓ども、茶碗片手に高咄し。

「ノウ婆様、こな様も見たところが、上方で歴々のお衆さうなが、なんのために面白うもないこの在所へはござつたぞいの」

「ア、コレ／＼甚作、そりや言やんな。京の町は武智という悪人が、春長様を殺して大騒動。大方また下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて来て、武智とは是非に一合戦なけりや済まぬわいなう」

「そんなら年寄りはどうか／＼京の町にはゐられぬ。とかく危げのないやうにこんな在所へ来てゐるが、大出来／＼。時に近づきがてら妙見講を勤めるとは

よい手廻し、大きな馳走に逢ひました。これから随分お心安ういたしませう、サア／＼いなう」

と口々に、言ひたい事をたくしかけ、喋り廻つて帰りける。

老母はつど／＼門送り、庭の千草に打つ水も、保つ葉ごとに風かほる。軒を目当てに来る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家来を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺ふ切戸の庭先に、花に心を養う老女。それと見るより手をつかへ、

「後室様の見舞ひとして、たゞ今参上いたせし」と慇懃に相述ぶる、詞に老女は打笑み、

「ヲ、珍らしい嫁女、孫嫁。遥々の道ようこそようこそ。さりながら倅光秀、当月二日本能寺にて、主君を害せし無法者、同じ館に膝並ぶるも、先祖の恥辱

身の穢れと、館を捨てゝこの在所へ、身退きしこの
婆を、見舞ひとはをこがましい。善にもせよ悪にも
せよ、夫につくが女の道、操の前は武智十兵衛光秀
が妻、そなたはまた十次郎光義が嫁でないか。生死
分らぬ戦場へ、赴く夫を打捨てゝ浮世を捨てた姑に、
孝行尽すは道が違ふ。妻城に留つて、留守を守るが
肝要ぞや。モウ寡婦暮しの楽しみに、夕顔棚の下
涼み、捨つべきものは弓矢ぞ」

と、言ひ放したる老女の一徹、後は詞もなかりけり。
常の氣質と逆はず、

「いかさま後室様の仰つしやる通り、この様にたゞ
お一人ござつたら、何もかも気散じで、マア第一は
お身の養生。今から私も初菊も、後室様のお傍にゐ
て、飯も焚いたり茶も沸かし、お宮仕へをせうぞい

の」

と、あり合ふ前垂打掛の、上に引き締め茶釜の傍、花
香の籠もる姑の、渋々機嫌を取兼ねる。娘心に初菊
も、マどう済むことか濁り井の、深き奇縁の釣瓶縄、
『水汲み上げん』と立寄れば。

「コレ／＼嫁たち。シテ孫十次郎は城に残つてゐめ
さるか」

「さればでござります。十次郎が願ひには、『どうぞ
今日の軍に、高名手柄が現はしたいと、父上までは
願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意で
なし。母に取次ぎしてくれ』と、くれぐ／＼の願ひゆゑ
あまり健気さ、祖母様に御機嫌の程いかゞぞと、窺
ひに参りました」

と語るうち、老母は涙をはら／＼と流し、

「ヲ、うるさの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の邪非道の軍の評定、聞くが厭さのこの住居。ガまた孫を誉めるではなけれども、非道な倅光秀が子に、十次郎といふ武士が、生れて来るとはこれも因縁、悔んで返らず。戦場のこと聞きたうない。アイや／＼情けなの浮世や」

と、無量の思ひ百人の数珠爪繰つてゐたりける。

折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷背に息せき、蛙飛込む道野辺の、清水結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人、門口に立休らひ。

「諸国修行の一人旅。近頃申し兼ねたれど、お宿の報酬に預りたし。押しつけながら」

と言ひ入るゝ、声を老母が聞き取つて、
「見苦しうござりますれど、お心置きなう御一宿」

「それは千万忝ない。さやうならば御遠慮なしに、御免々々」

と上がり口、腰打ちかくれば二人の女、草鞋の紐を解きかゝれば

「ア、勿体ない／＼、構うて下さりますな。旅しつめた妨主の気散じ、木納屋の隅でもついころり。蚊帳も蒲団も入りませぬ。お心遣ひ御無用」

と、詞半ばへ表口、人目を忍びたゞ一騎、窺ひ立聞く
武智光秀、『心得がたき旅僧』と、生垣押分け差覗き、思はず見合す母の顔、老母は何か心にうなづき、

「ヲ、わしとしたことが心のつかぬ、コレ御出家様、この板囲ひがすなはち風呂場、水は幸ひ汲んであり、ついばや／＼と燃して、暑い時分ぢや行水して休んで下さりませ。婆も後で相伴しませう」

「ア、イヤそれには及びませねど、相伴とあれば沸ませう。そんなら御免なされませ」

と、包み引下げ気散じに、湯殿をさして入りにける。

味方の軍卒両手をつき、

「御子息十次郎光義様。『後室様に御願ひの筋あり』

と、只今これへ御越し」

と言ふ間ほどなくしづ／＼と、家来に持せし鎧櫃舁

き入れさせて打ち通り、

「コリヤ／＼者ども、そち達に用事はない。陣所へ

早く」

と追つ立てやり、威儀を正して両手をつき、

「母様を以て御願ひ申せし出陣、御聞き届け下され

なば、武士の本意」

と十次郎、思ひ込んでぞ願ひける。老母は見るより

機嫌顔、

「オ、珍らしい十次郎、出陣の願ひとな。倅を見限りこの所へ身退きしに丁寧な願ひの筋。最前嫁女に詳しく聞きました。とても出陣しやるなら、祖母が願ひはこの初菊、今宵この家で祝言の盃してから門出しや。なんと嫁女嬉しいか」

と、老ひの詞に初菊は飛立つばかり気もいそ／＼、心の悦び穂に出づる、顔は上気の夏楓、色も媚くばかりなり。たゞ黙然と十次郎、『今日初陣に討死と、覚悟極めしこの体。お暇乞ひに参りしと、知らせ給はぬ悲しや』と、涙吞込み忍び泣き。操の前も立上がり、

「祖母様の御機嫌の変らぬうちに固めの盃」

「ヲ、それ、孫も大方心せき、操は九献の用意しや。

十次郎が初陣の、鎧の役はすぐに花嫁」

三国一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連
れて三人は奥の

こいにようぼうそめわけたづな

恋女房染分手綱

〔解説〕

宝暦元年（一七五一年）竹本座初演。吉田冠子・三好松洛の合作による全十三段の時代物。近松門左衛門の「丹波与作待夜小室節」の改作とされていますが、十段目「道中双六の段」、それに続く「重の井子別れの段」は、原文がそのまま使われています。十段目は「恋十」と称され、親子の別れを描く名作として、文楽、歌舞伎でも度々上演されています。

〔あらすじ〕

丹波の藩主由留木（ゆるぎ）家の家老、伊達与之兵衛のせがれ、与作は竹村定之進（たけむらさだのしん）の娘重の井と通じ、与之助という子を設けますが、悪者の讒言で国を追われ、馬追いとなります。その後、重の井は由留木家の調姫の乳人となり、関東へ興入れする姫君のお供で江戸へ出発しようとしています。

数え年でまだ十二歳と幼い調姫は、関東へ行くことを嫌がりむづがっているの、門前の馬方三吉が持っているた道中双六で機嫌をとることにします。一番に上がった姫はすっかり機嫌を直して早く東へ行こうと言い出し、

重の井は三吉に菓子等を与えてねぎらいます。三吉はお乳の人の名が重の井と聞いて、そんならわしの母さんだと取りすがり、守り袋を証拠に見せて、「行方の知れぬ父を捜し、親子三人で暮らしたい、他に望みはない、昼は馬追い、夜は草鞋を作つて両親を養う」と健気に言います。重の井は、三吉が我が子と悟りつつ、三吉と姫君が乳兄弟であるとわかったら、姫の嫁入りのじゃまになると思い、「今は母でも子でもない」と泣く泣く言い聞かせる。三吉は、父の帰参がかなうよう殿様をお願いしてくれと頼みますが、母は聞き入れずに追い立てます。泣く泣く出て行く三吉の後ろ姿に、重の井はたまらず声をかけ、手持ちの金を渡そうとしますが、三吉は母様でもない赤の他人に金をもらう理由はないと言います。

いよいよ花嫁の行列の出発。重の井はそしらぬ顔で、姫君の慰みのために三吉に馬子唄を歌わせよと命じます。三吉は涙声に馬子唄を歌うのでした

重の井子別れの段

輿にぞ入り給ふ。

お側の衆にはやされて稚な心の姫君。

「かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サア

く行かうはや行かう」

「ヤアござらうと仰っしゃるか。そりや目出たいわ

目出たいわ又もや御意の変らぬ間に、行例揃へ」

と立騒ぐお乳の人は勇みをなし、

「そんなら今一度大殿様お袋様とお盃。これも馬方

殿お蔭ぢや。出かいたくそちには礼いふ褒美やる。

そこに待ちやや」

とざぐめき渡り奥にお伴し入りにけり。馬方はつひ

に見ぬ金の間をうそくと、覗き廻れど筵のほか、

踏みも習はぬ備後表。

「エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、こつちの内が結構でござる」

と、独り言してゐたりけり。お乳の人は大高に、お菓子さまさま文匣に盛入れ、

「ドレく三吉そこにか。マアくそちは健者ぢや。

道中双六お目にかけそれゆゑに姫君様、お江戸へご

ざろと御意なさるゝ。お上にもご機嫌これは御前の

お菓子ありがたう頂きや。お錢三筋買ひたい物買

やゝ。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あ

らば、お乳の人の重の井に逢はうと云や。見れば見

るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身は、マよく

くであらう」

といと懇ろの詞の末。三吉つくづく聞きますまし、

「由留木殿の御内、お乳の人の重の井様とはお前か。

そんならおれが母様」

と抱きつけば

「ア、こは慮外な。おのれが母様とは、馬方の子は持たぬ」

と、もぎ放せばむしゃぶりつき、引退くれば縋りつき、

「なんのないことを申しませう。わしが親はお前の昔の連合ひ、この御家中にて番頭、伊達の与作。その子は私こな様の腹から出た、与之助はわしぢやわいな。父様は殿様のお氣に違うて、国をお出なされたは小さい時で覚えねど、沓掛の乳母が話には、母様も離別とやらで、殿様に御奉公。こなたを乳母が養育し、父様に逢はせたいと思へども、甲斐もない、母様の細工の守り袋を証拠に、由留木殿のお乳の人、重の井様と尋ねよ、と懇ろに教へて乳母はおれが五つの年、久しう痰を煩うて鳥羽の祭の餅が咽に詰った

やら、つひ死んでのけました。乳母が子の一平は父様を尋ねに行く、在所の衆が養うて、やう／＼馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。

コレ、守り袋を見やしゃんせ。なんの嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。ほかの望みはなんにもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人、一所にゐて下され。見事沓も打ちまする。この草鞋もわしが作った。昼は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り。父様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拝みまする母様」

と取り付き抱き付き、泣きめたり。お乳ははつと氣も乱れ、見れば見るほどわが子の与之助。守り袋も覚えあり、飛びついて懷に抱き入れたく氣は急けども、

「アッア大事の御奉公養ひ君のお名の疵、偽って叱

らうかイヤ可愛げにさうもなるまい。マアちよつと抱きたい。ア、どうせう」

と、百千色の憂き涙。二つの目には、保ちかねむせび、沈みてゐたりしが、

「イヤ、わが子ながらも賢しい者。偽つて誠とせず、母を心の汚い者と、蔑しまるゝも情なし。訳を語つて合点させ恥しめて帰さんもの」

と、涙拭うて氣を鎮め、

「こゝへ来い与之助」

と、引寄せて両手を取り、

「さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしうなせ尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足まで、母はかうは産みつけぬ。美しい黒髪をこのやうに剃り上げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ」

と、又さめぐと泣きけるが、

「コレ物をよう合点しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。浅ましうなりさがつたを嫌うて云ふではさらさらない。こゝの訳をよう聞きや。母は元御前様の奉公人。与作殿は奥家老の御子息。互ひに若木の恋風に、摺れつ纏れつ一夜が二夜と度重なり、そなたを懐胎この事お上へ聞えては、父も母も御成敗に合ふゆゑに、病氣と偽り、乳母が所で産み落し、育てゝ貰ふその内に、情なや八平次といふ者の仕業にて、父様は御追放。この母が愠氣から、不義の事頭はれ、既に御成敗に極まりしを、わしがためには父様、そなたのためには、祖父様の定之進様、勿体ない、わしに代つての御切腹。お姫様の乳離れといひ立て殿様の御慈悲にて、姫君様のお乳の人首尾さへよければそなたも今、奥家老の

御子息。二番と下座に下らぬ人。その時母も一所に退けば尤も夫婦の道は立てども、身にあまったお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれと、父様のことわりゆゑ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義に代へて、飽かぬ離別を、したわいの。男の子は稚なうても、御勘気の末氣遣ひな。与作が子とばし云やんなや。サア早う御門へ出や。ア、いかなる因果な生れ性。現在わが子に馬追ひさせ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これがなになること」

と声を、忍びに泣くばかり。子は生れつき賢くて聞分けあるほどなほ泣き入り、

「悲しい話を聞きました、さりながら、常に乳母が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母

様にさへ逢うたらば父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし」

と云へばちやつと口を押へ、

「ア、勿体ない。その乳兄弟は云はぬこと。姫君様は関東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間体。三吉といふ馬追ひが乳兄弟にあるなどと、どう妨げにならうやら、蟻の穴から堤も崩れる。軽いやうでも重いことひそひそ云うて人も聞く。まづ早う出てくれ」

と泣く／＼云へば三吉。

「母様。あんまり遠慮過ぎました。まづ云うて見て下され」

「まだ云ひをるか聞き分けない。夫のことわが子のこと母に如才があるものか。合点の悪い聞き分けない」

と、制する内に奥よりも、

「お乳の人はどこにぞ。御前から召します」

と呼ばゝれば、

「アレ聞きや人が来る出てたも」

と、手を取つて引出す。不憫や三吉しくしく涙。頬冠りして目を隠し、沓見まつべて腰につけ、見すばらしげな後影。

「コリヤま一度／＼こちら向きや、山川で怪我しやんな。雨風雪降り夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに下痢や麻疹の用心しや。可愛の形やいたしたしや。千三百石の代取がなんの罰ぞ咎めぞ」

と、式台の壇箱に身を投げ、伏して歎きしが、懷中のありあふ一步十三袂紗に包み、

「これ嗜みに持つてあや」

と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、

「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬお構ひ。その一步も入らぬ。馬方こそすれ、伊達の与作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貰ふ筈がない。エ、／＼胴慾な。母様覚えてあさしやれ」

と、わつと泣き出すその有様。母は魂消え入つて、
「養ひ君お家の御恩思はずはさて、一人子を手放してなんのやらうぞ。奉公の身の、浅ましや」

と悶え、焦れて歎きける。時に奥口ざぐめいて

「はや御立ち」

と姫君の、御輿かき上げ行列立て、お乳の人の乗物を、ひら付けにこそかき寄せけれ。お乳はさあらぬ顔付して

「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乗物に引付け、お慰みに唄はしや」

「畏った」

と宰領ども。

「コリヤそこな自然生め。唄ひをらう」

とぎこつなく。

「ヤアこいつは吠へをるか」

「なんぢやこりやいまいましい」

と、握り拳を二つ三つ、頂きながら泣声に、

へ坂は照るく、鈴鹿はくもる。土山間の間の、土

山、雨が、降る。降る雨よりも親子の涙なかに、しぐ

るゝ、雨やどり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。